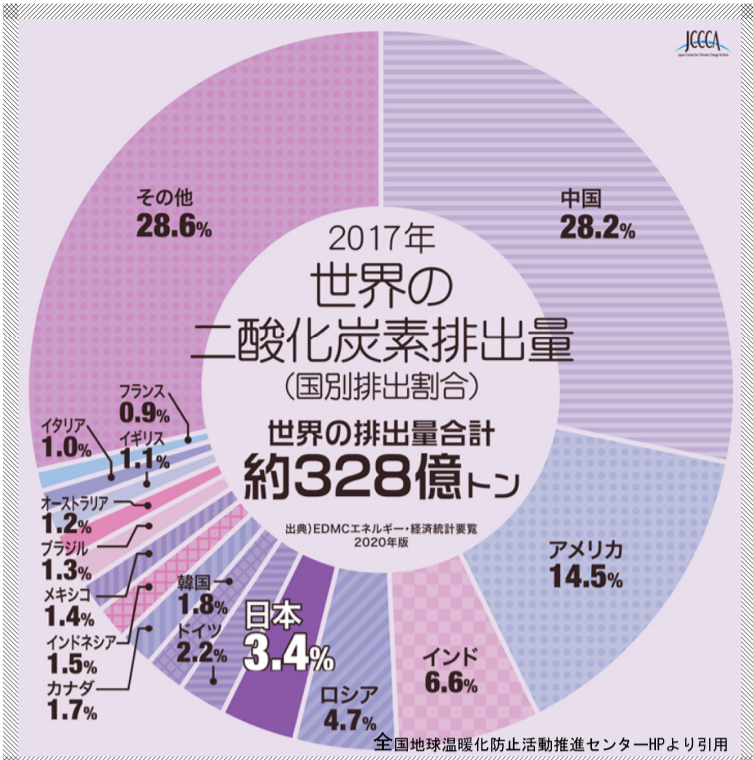


猿新聞

地球温暖化が招く 日本農業の危機

地球温暖化による、ここ数十年の気候変動は人間の生活を始め、農業、野生鳥獣、自然の生態系にさまざまな悪影響を与えています。地球温暖化を食い止めることが、人類に課せられた今世紀最大の課題となっています。

日本人は、縄文時代より現代に至るまで季節の移り変わりを敏感に捉えて暮らしを立ててきました。古代の人々は、秋の川を溯上するサケ漁や、森林から生産されるドングリなど木の実の採取、冬のシカ・イノシシの狩猟にも、季節の



人間には、かなり高い温度適応能力があるため、気温が上昇しても直接受ける影響は大きくありませんが、大きく温暖化の影響を受けると考えられる野生生物の数は、およそ2,800種といわれています。この数字は、今後さらに増加してゆくと見られています。温暖化に対する「生き物」の対応策は、移住・適応・死のいずれか以外の選択肢はないのです。

温暖化による弊害でクマやヘビなど冬眠動物が冬眠に入れない状態になっていると言います。クマは気温が1℃上がるだけで、冬眠日数が6日も減ってしまうといわれています。また、温暖化によるシベリアの永久凍土の溶解が懸念されています。永久凍土は大量の温室効果ガスを内包している溶解により、それが大気中に放出される温

暖化を招きます。加えて、永久凍土の溶解は、長年閉じ込められてきた病原菌なども放出され、コロナ禍が進展する中、心配されています。さて、ここで地球温暖化と日本の野生鳥獣の関連について考えてみることにします。アフリカなどでは雨が降らない乾季に水や草を求め、イノシシなどの野生動物が大移動をします。その時におびたらしい数の動物の命が失われています。自然淘汰です。大移動は恒常的に毎年繰り返され、自然的に個体数が調整され、絶滅を免れているのです。このように自然的

な淘汰がないと増えすぎて生態系のバランスが崩れ生き残れず絶滅するのです。日本でも規模こそ違へ、冬場の餌の少ない時期に野生動物の大量死が発生し、個体密度が自然的に調整されてきました。一定面積あたりの個体数で、餌量と個体数は密接な関係があります。春から秋にかけて餌が大量にあっても冬の餌がなければシカやイノシシは生き残ることが出来ません。餌の少ない冬場はシカなどの野生動物は、飲まず食わずで、弱体化した個体は自然淘汰され、個体数が自然的に調整され絶滅を免れてきたのです。温暖化といえど夏場の気温の上昇を考えがちですが、冬場の気温も押し上げ冬はより暖かくなり、野生動物の餌となる植物は今まで以上に繁茂します。

暖冬によりシカは近年、急激に個体数を増やし生息地を広げ、その分布は大きく拡大傾向にあります。その要因は、中山間地での人口減少、狩猟者の減少、耕作放棄地や森林面積の増加などがあります

温暖化が進むと植物の生息域が北方へ移動するが、植物の移動速度は極めて遅く、温暖化に間に合わないため、絶滅が危惧される種は多いといえます。例えば、平均気温が2度上昇すると、死滅する植物がいて、その種は北に200km移動すれば生き延びられるとします。動物は自由に移動できますが、植物は種を飛ばしたりして分布を広げるしかなく、その速度は年間1kmほどで、温暖化には追いつけず絶滅してしまうのです。人間には、温度適応能力があるため、人体への直接受ける影響は少ないですが、農林水産業には、少なからず影響が出るものと思われています。

農作物は、一般的に気温が上昇すると収量は上がるが、限度を超えると品質が低下したり枯死してしまいます。北海道・東北以南での米作りでは、温暖化現象により白未熟粒(コメが白く濁る)や胴割れ(コメに亀裂が生じる)が多数発生している、すでに米作の中心は東北や北海道に移ってしまっています。その昔、北海道では米作りが出来なかったように、これからは北海道・東北以南での米作りは困難が見込まれています。また、長野県でのリンゴの栽培も厳しいという指摘もあります。

移り変わりを敏感に捉え採取・狩猟活動を行っていたと思われ、ところが、地球温暖化による気候変動は、日本の四季にも様々な問題を引き起こし、快適な季節が少なくなっています。近い将来、日本の四季が二季になっていくかもしれません。

温暖化による弊害でクマやヘビなど冬眠動物が冬眠に入れない状態になっていると言います。クマは気温が1℃上がるだけで、冬眠日数が6日も減ってしまうといわれています。また、温暖化によるシベリアの永久凍土の溶解が懸念されています。永久凍土は大量の温室効果ガスを内包している溶解により、それが大気中に放出される温

暖化を招きます。加えて、永久凍土の溶解は、長年閉じ込められてきた病原菌なども放出され、コロナ禍が進展する中、心配されています。さて、ここで地球温暖化と日本の野生鳥獣の関連について考えてみることにします。アフリカなどでは雨が降らない乾季に水や草を求め、イノシシなどの野生動物が大移動をします。その時におびたらしい数の動物の命が失われています。自然淘汰です。大移動は恒常的に毎年繰り返され、自然的に個体数が調整され、絶滅を免れているのです。このように自然的

な淘汰がないと増えすぎて生態系のバランスが崩れ生き残れず絶滅するのです。日本でも規模こそ違へ、冬場の餌の少ない時期に野生動物の大量死が発生し、個体密度が自然的に調整されてきました。一定面積あたりの個体数で、餌量と個体数は密接な関係があります。春から秋にかけて餌が大量にあっても冬の餌がなければシカやイノシシは生き残ることが出来ません。餌の少ない冬場はシカなどの野生動物は、飲まず食わずで、弱体化した個体は自然淘汰され、個体数が自然的に調整され絶滅を免れてきたのです。温暖化といえど夏場の気温の上昇を考えがちですが、冬場の気温も押し上げ冬はより暖かくなり、野生動物の餌となる植物は今まで以上に繁茂します。

暖冬によりシカは近年、急激に個体数を増やし生息地を広げ、その分布は大きく拡大傾向にあります。その要因は、中山間地での人口減少、狩猟者の減少、耕作放棄地や森林面積の増加などがあります

温暖化が進むと植物の生息域が北方へ移動するが、植物の移動速度は極めて遅く、温暖化に間に合わないため、絶滅が危惧される種は多いといえます。例えば、平均気温が2度上昇すると、死滅する植物がいて、その種は北に200km移動すれば生き延びられるとします。動物は自由に移動できますが、植物は種を飛ばしたりして分布を広げるしかなく、その速度は年間1kmほどで、温暖化には追いつけず絶滅してしまうのです。人間には、温度適応能力があるため、人体への直接受ける影響は少ないですが、農林水産業には、少なからず影響が出るものと思われています。

農作物は、一般的に気温が上昇すると収量は上がるが、限度を超えると品質が低下したり枯死してしまいます。北海道・東北以南での米作りでは、温暖化現象により白未熟粒(コメが白く濁る)や胴割れ(コメに亀裂が生じる)が多数発生している、すでに米作の中心は東北や北海道に移ってしまっています。その昔、北海道では米作りが出来なかったように、これからは北海道・東北以南での米作りは困難が見込まれています。また、長野県でのリンゴの栽培も厳しいという指摘もあります。

人間には、かなり高い温度適応能力があるため、気温が上昇しても直接受ける影響は大きくありませんが、大きく温暖化の影響を受けると考えられる野生生物の数は、およそ2,800種といわれています。この数字は、今後さらに増加してゆくと見られています。温暖化に対する「生き物」の対応策は、移住・適応・死のいずれか以外の選択肢はないのです。

温暖化による弊害でクマやヘビなど冬眠動物が冬眠に入れない状態になっていると言います。クマは気温が1℃上がるだけで、冬眠日数が6日も減ってしまうといわれています。また、温暖化によるシベリアの永久凍土の溶解が懸念されています。永久凍土は大量の温室効果ガスを内包している溶解により、それが大気中に放出される温

暖化を招きます。加えて、永久凍土の溶解は、長年閉じ込められてきた病原菌なども放出され、コロナ禍が進展する中、心配されています。さて、ここで地球温暖化と日本の野生鳥獣の関連について考えてみることにします。アフリカなどでは雨が降らない乾季に水や草を求め、イノシシなどの野生動物が大移動をします。その時におびたらしい数の動物の命が失われています。自然淘汰です。大移動は恒常的に毎年繰り返され、自然的に個体数が調整され、絶滅を免れているのです。このように自然的

な淘汰がないと増えすぎて生態系のバランスが崩れ生き残れず絶滅するのです。日本でも規模こそ違へ、冬場の餌の少ない時期に野生動物の大量死が発生し、個体密度が自然的に調整されてきました。一定面積あたりの個体数で、餌量と個体数は密接な関係があります。春から秋にかけて餌が大量にあっても冬の餌がなければシカやイノシシは生き残ることが出来ません。餌の少ない冬場はシカなどの野生動物は、飲まず食わずで、弱体化した個体は自然淘汰され、個体数が自然的に調整され絶滅を免れてきたのです。温暖化といえど夏場の気温の上昇を考えがちですが、冬場の気温も押し上げ冬はより暖かくなり、野生動物の餌となる植物は今まで以上に繁茂します。

暖冬によりシカは近年、急激に個体数を増やし生息地を広げ、その分布は大きく拡大傾向にあります。その要因は、中山間地での人口減少、狩猟者の減少、耕作放棄地や森林面積の増加などがあります

温暖化が進むと植物の生息域が北方へ移動するが、植物の移動速度は極めて遅く、温暖化に間に合わないため、絶滅が危惧される種は多いといえます。例えば、平均気温が2度上昇すると、死滅する植物がいて、その種は北に200km移動すれば生き延びられるとします。動物は自由に移動できますが、植物は種を飛ばしたりして分布を広げるしかなく、その速度は年間1kmほどで、温暖化には追いつけず絶滅してしまうのです。人間には、温度適応能力があるため、人体への直接受ける影響は少ないですが、農林水産業には、少なからず影響が出るものと思われています。

農作物は、一般的に気温が上昇すると収量は上がるが、限度を超えると品質が低下したり枯死してしまいます。北海道・東北以南での米作りでは、温暖化現象により白未熟粒(コメが白く濁る)や胴割れ(コメに亀裂が生じる)が多数発生している、すでに米作の中心は東北や北海道に移ってしまっています。その昔、北海道では米作りが出来なかったように、これからは北海道・東北以南での米作りは困難が見込まれています。また、長野県でのリンゴの栽培も厳しいという指摘もあります。

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会
発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：220部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：30部



大移動
この大移動で、おびたらしい数のイノシシの命が失われています。



地球温暖化による異常気象で、このような大洪水が毎年のように起きています。毎日新聞より引用

懇談会開催

名張市農林資源室 名張鳥獣害問題連絡会



懇談会風景

令和2年7月28日、名張鳥獣害問題連絡会は、名張市農林資源室と懇談会を開催致しました。出席者は連絡会からは6名。農林資源室からは、岩並室長他2名の職員が出席。自己紹介の後、2時間余り懇談を行いました。

懇談内容は、主に次の5つの問題について意見が交わされました。

『最近の名張市における獣害の現状』

①サル被害
『以前、個体数55頭のA群が15頭に、また、B群は約60頭から10頭に減少。（B群はしばらく発信器が機能していなかったため、はっきりとした数字が把握できていなかった）。

②アライグマの被害
『特に最近、国津や西田原地区での被害が増えている。名張での初見は、平成4年丸の内見は、ペットで飼われていたアライグマが野生

化して可能性が指摘されている』。

③ハクビシンの被害
『外来種ですが、江戸時代から日本に住み着いていて、現在在来種になっているために捕獲は出来ない』。

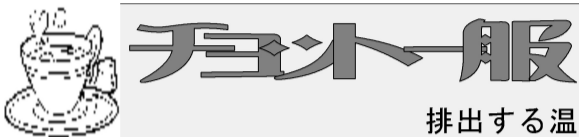
④ヌートリアは
『最初の数年間100頭余りを捕獲したために、あまり増えていないのが現状』。

『名張の山は、スギやヒノキの人工林が多い。山中にサルの餌になる桑の木や、ニセアカシアなどを植えたらどうか？』

『平地に植えると、他の野生動物の餌になってしまう』。

『シカ、イノシシの防護対策について』

『防護柵は管理に不備が見られる。適性な個体管理は必要。現在、国の事業として取り組



牛のゲップ 地球温暖化を加速

国連の「気候変動と土地に関する特別報告」は、食料生産・消費システムから排出される温室効果ガスが、世界の温室効果ガス総排出量の21~37%を占めていることを初めて明らかにし、世界に衝撃を与えました。この分野での温室効果ガスの主な排出源は、農地、林地、大量のメタンガスを出す牛などの反すう動物の「ゲップ」や排泄物です。そもそも家畜の飼育は温室効果ガスを増やす上、とくに牛は、鶏や豚に比べて、

排出する温室効果ガスが多く、国連食糧農業機関のデータでは6倍以上だと言われています。その理由は、牛は食べたエサを胃の中の微生物の力で発酵させることで消化しやすくして、その際に発生する温室効果ガスの一つメタンガスを大量にゲップとして大気中に排出するからです。牛のげっぷは温室効果ガスのひとつである「メタン」を多くふくんでいるため、地球温暖化を進めているというのは事実です。

（国連の気候変動と土地に関する特別報告より引用）

文・田北 利治

まれてはいるが、最近家庭菜園にも被害が増大している。サル・イノシシ・シカによる住宅環境被害については、今後、環境対策室と連携して取り組んで行く』。

『市民に対しての獣害学習やセミナーなどの取り組みについて』

『今後、必要に応じて、研修会を開催する。（特にアライグマ）市民から、相談があれば職員を派遣して指導していく。今年はコロナ禍の影響で県のセミナー開催もあるか不明』。

『ジビエに対する対策はどうか？』

『現在、市、広域からの支援は行っていない。宇陀市では、今後市と奈良県で加工施設設置を検討中。三重県で



も、三重ジビエとして県のホームページに、ジビエについての制度設計について掲載中』。

『豚コレラに対する対策は』

『経口ワクチンの散布については、三重県を取り組みであり、散布場所についても地元猟友会の方と県が相談している。散布するワクチンは、国から配布されたものであり、国の食品安全委員会での既に安全と評価された成分でできている』。

サル出没状況

二ホンサルは本州北限の下半島でも生活出来る寒さにはめっぽう強い動物ですが、暑さにはとても弱い動物です。二ホンサルには体温を外に逃す発汗という体温調節機能が備わっていないため、夏場は大の苦手です。猛暑が続く近年では、まだ明けやらぬ早朝と日の落ちた夕方が、菜

食のピークになっています。また、夏場は子育ての時期で攻撃性が最も高まる季節です。A・B群共、子連れのサルが目立ちます。

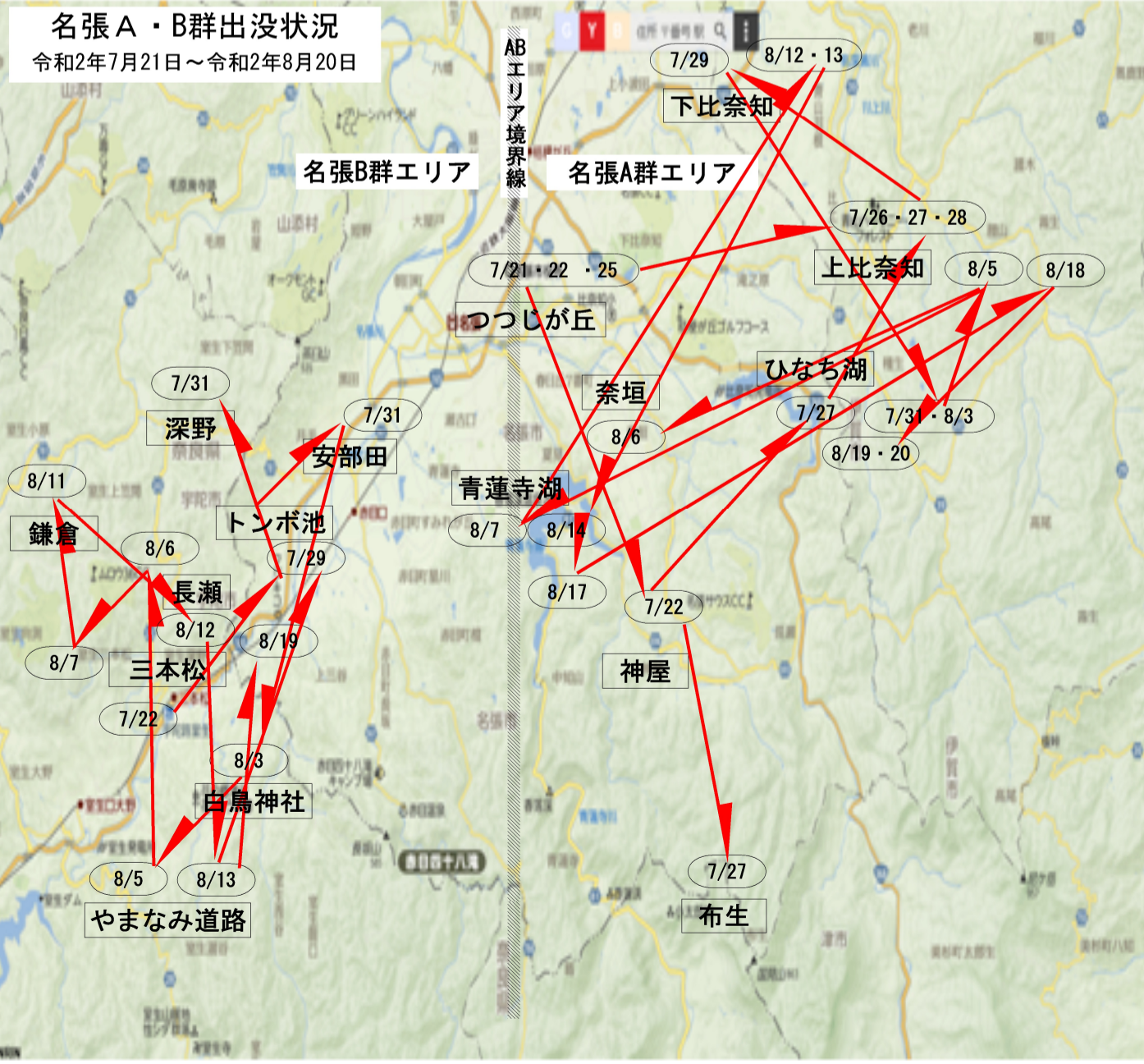
最近、A・B群共に遊動域が大きく広がっています。夏場は餌が豊富にあるように思われますが、自然界では少ない時期だからです。サルは群れのメンバーが必要と

する食物量を得られる範囲を動かしますので餌の少ない時期は遊動域が広がるのです。サルの食物が少ない植林地の占める割合が高い地域では、広い遊動域を持たざるを得ない大きな理由の一つになっていると考えられます。

A群は、遊動域を広げ最近出没の無かった布生周辺にまで足を伸

ばしてきています。B群でも遊動域が広がっています。7月31日、深野で小ザル1頭が檻にて捕獲されたとのことです。A・B群エリア共に、果樹園のモモやカボチャなどに被害が発生しています。

柵などの防護対策の再点検・強化が必要です。



名張A・B群出没状況
令和2年7月21日～令和2年8月20日